

名曲「さくら さくら」

野口幹夫

先に KOZOOM 向けエッセイ「桜への想い」を書いたがその追加です。

1) 「さくらさくら」の生まれ

そこに童謡「さくら さくら」について、「作詞家も作曲家もわからないまま「日本古謡」とされている」とまで書いたが、明治以降の作品なら作家不明ということはないので、それでは江戸時代からの遺産かとも思い、AI チャット GPT に尋ねてみた。見事にこたえてくれた。その要点を紹介すると

「成立は江戸末期（19世紀前半頃）で江戸のお琴の練習曲としてつくられた。明治時代に入り文部省唱歌集に採録され、全国的に広まった。



この曲は日本音階（五音音階）で作られている。そのため西洋音楽とは違う、日本独特の響きがあり、日本文化を紹介する場でもよく演奏された。19世紀後半から20世紀初めにかけてのウィーン万国博覧会 パリ万国博覧会で、箏や三味線の演奏で「さくらさくら」がよく演奏された。そのため西洋の人々にとって「日本音楽＝さくらさくら」という印象が広まった。」

「さくら さくら」がなぜ日本人の心に響くのが理解できた。

2) 「さくらさくら」のメロディがある日本文学でその中核になっていた。

このメロディが全作品の物語のキイとなる出来事として描かれた日本の代表的文学がある。山崎豊子の「大地の子」である。この巨大作は1984年から8年にわたる取材の上雑誌文藝春秋に1989年から3年かけて連載された。満州

開拓民として生まれた子供「一心君」が国民学校1年の夏休みに敗戦を迎え、一

家はちりじりに逃避行。最後は一人に

なったが、幸い親切な中国人の学校教

師夫婦に拾われ中国人として育てら

れた。良い教育も受け、中国人技師に

成長し鉄鋼工場に勤務する。しかし折

からの文化革命の騒動の中 日本人

の生まれとして、迫害され追われて過

酷な囚人生活を強いられる。その内蒙

古の草原の中の囚人生活を送ってい

る時、仲間の囚人の一人が吹く口笛の

メロディにひかれて彼を追う。そして出会った彼も満州開拓民の一人でちょっ

と年上であった。そのメロディは「さくらさくら」だった。彼はその歌も知らな



かったが なぜか心が引きづられるようにしてその口笛の少年を追ったのだ。

そして「一心」は全く忘れていた日本語を彼から学ぶ。

お陰で文化革命が終焉して技術者に復帰するとき、日本語のできる技術者として 当時開始された日中経済交流の主要人物として活躍する物語だ。

このように「さくらさくら」のメロディが遺伝子としてだけ残っていた日本人の魂を揺さぶるこの事件がなければ、この大作の筋書きは発展しなかったのだ。

この部分は全20章の巨大作のうちの「8章 さくらさくら 」として印象深く置かれている。

「さくら さくら」はこれから もっと心に響く名曲として、尊敬したい。

以上